＜中学校＞

１．教材名　　長崎に原爆が投下された日

２．教材内容

資料①「おかあちゃん」荻野美智子（当時１０歳：山里中３年の時の作文）

雲もなくカラリと晴れたその日であった。私たち姉妹は、うちの２階でままごとをして遊んでいた。おかあさんは畑へ、ナスをもぎに行っていた。出がけに「１１時になったら、しちりんに火をおこしなさいよ」と、いいつけていった。けれども私たちは、遊びがおもしろいので、時計が１１鳴ったのに、ひとりもこしを上げず、やっぱりままごとに夢中になっていた。

何気なしに私は頭を上げて窓を見た。そのとき、ピカリといなづまが光った。「あら」と私はいった。私のからだが、よろよろっとよろけた。つぎのしゅん間には、私はもう家の下じきになって、身動きひとつできなかった。何とかして抜け出そうとすればするほど苦しくなる。ジイッとして、外のようすをうかがうよりほかに仕方がなかった。ふたりの姉のすがたが外に見えた。うれしかった。大よろこびで、「助けてえ、助けてえ！」と私はわめいた。

声は、姉たちの耳にとどいた。姉たちはすぐ走りよってきて、私を助け出そうとした。しかし、土壁のえつり竹の組んだのが間をさえぎっていて、押しても引いてものけられなかった。大きな姉がおろおろ声で、「がまんしろ、もうじき、おかあちゃんもおとうちゃんも帰ってくるけんね。ねえちゃんはだれか、かせい人をよんでくるけん、ね。」と、私をはげましておいて、向こうへ走っていった。

私はたてとよこに組んだえつり竹のすき間から、わずかばかり見えている外を、一心に見つめて、おかあちゃんが来るか、おとうちゃんが来るかと待っていた。やがて大ねえちゃんが、水兵さんを４，５人つれて走ってきた。その人びとの力で私は助け出された。

外へ出てみて、まず私はびっくりした。朝からあんなに晴れた日だったのに、今はまっくろい雲がむくむく、むくむくと動きまわる恐ろしい日に変わっていた。

私はふらふらよろめき、防空ごうの方へ行こうとした。すると家の下から、 助けてえ……おじちゃん」とさけぶ声がもれてきた。それは弟の声であった。大ねえちゃんが、いちばん先に聞きつけたのであろう。すぐ声のところへ走っていって、たくさんの瓦をとりのけて、とうとう弟を引き出した。

そのときまた向こうの方で、小さな子の泣き声がもれてきた。それは２歳になる妹が家の下じきになっているのであった。いそいで行ってみると、妹は大きなはりに足をはさまれて、泣きくるっていた。水兵さんも手伝って、みんなではりを取りのけようとしたが、はりは４本つづきの大きな物でびくともしなかった。はさまれた足が痛いので、妹は両手をばたつかせて泣きもがいている。私たちはどうしたらよいのだろう－。

水兵さんも「これはだめだ」といい出した。よその人が水兵さんのかせいをたのみに来たので、水兵さんは、埋まった人を救い出しに向こうの方の、つぶれた家へ走っていってしまった。あとに残ったのは、私たちきょうだい、子どもばかりであった。

おかあさんは、畑で何をまごまごしているのだろう。早く帰ってくださあい。おとうさんはなぜ来ないのだろう。妹の足はちぎれてしまうのに－。私はすっかり困っていまい、ただせのびして、あたりを見まわしているばかりだった。

向こうから矢のように走ってくる人が目についた。頭のかみの毛が乱れている。女の人だ。はだからしい。むらさき色のからだ。その人が大きな声を出して私たちに呼びかけた。ああ、それがおかあさんでした。 おかあちゃん－」と私たちも大声で呼んだ。私たちは、もうこれでだいじょうぶと思った。

あちこちで火の手が上がりはじめた。となりのおじさんがどこからか現れて、妹の足をはさんでいるはりを取りのけようと、うんうん力んでみたけれども、やっぱり動かない。おじさんはがっかりしたように、大きなため息をついて、「あきらめんば、仕方なか－」と、いかにも申しわけなさそうにいっておじぎをしてから、向こうへ行ってしまった。

火がすぐ近くで燃えあがった。おかあさんの顔がまっさおに変わった。おとうさんはまだ帰ってこない。おかあさんは、小さな妹を見おろしていた。妹の小さな目も下から見あげていた。おかあさんは、ずうっと目を動かして、はりの重なりかたを見まわした。

やがておかあさんは、はりの下のすき間に身を入れ、はりの一ヵ所を右肩にあて、下くちびるをうんとかみしめると、「ううう……」と全身に力をこめた。バリバリ、バリッと音がして、はりが浮き上がった。大ねえさんが、妹をすぐ引き出した。おかあさんもとびあがってきた。そして、妹を胸にかたくだきしめた。

しばらくしてから、思い出したように私たちは、大声をあげて泣きはじめた。おかあさんは、その声を聞くと、気がぬけたのか、そのままそこへ、へたへたと腰をおろしてしまった。

そのときはじめて私は、おかあさんのすがたを落ち着いて見ることができた。おかあさんは、私たちのおひるに食べさすナスを畑でもいでいるとき、ばくだんにやられたのだ。うわ着も、もんぺも焼け切れ、ちぎれとび、ほとんど丸はだかになっていた。かみの毛はパーマネント・ウェーブをかけすぎたように、赤く短くちぢれて切れていた。からだじゅうの皮は大やけどで、ジュルジュルになっていた。さっき、はりをかついで押しあげた右肩のところだけ、皮がペロリとはげて、肉があらわれ、赤い血がしきりににじみ出ていた。おかあさんは、ぐったりとなって倒れた。そこへおとうさんが、よろめきながら走ってきた。おとうさんも大やけどを受けていた。

おかあさんは苦しみはじめ、もだえもだえて、その夜、死にました。

(原子野の下に生きて)

資料③「あの子は目を閉じた」山田勝彦

今から 11 年前に私が入社した会社に、大変お世話になった先輩が勤めておりました。彼は 28 歳の時結婚し、その妻は 24 歳だったそうです。周囲の人たちからも、うらやましがられるほど仲のよいカップルでした。1年近くして、待ちに待った赤ちゃんがうまれ、毎日のようにその子の話が飛び出してきました。

ところが、その子が1歳になり2歳になって、ようやく人間らしくこの世を生きていこうとする時、突然白血病の宣告を受けたのです。父母は献身的にその子につくしました。罪もない子は死を宣告されているとも知らず、時々ベッドに起きあがり、人形を力いっぱい抱きしめ、あるいはひと休みしては外を眺めて散歩をねだるのでした。

私は一体、こんなむごいことがなぜ起こったのかと思い、発病の原因を友人にたずねてみました。彼の口は重く、数分間だまったあと、思い余ったように話し出しました。

「ぼくの妻は原爆に遭い、運よく本人は助かったものの、家族は皆死んだのだ。ぼくも懸念はしていたが、子どもが白血病と宣言されたときは妻を憎んだ。しかし考えてみると、20 数年前の影響でその子どもが死なねばならないなんて、恐ろしいものだよ。」

私もそれまで原爆のこうした恐ろしさを聞いてはいましたが、実際に身近に起こってみると、ただ驚くばかりでした。そしてそれからというもの、その子が今まで以上に美しくかわいい子に思えてならないのです。

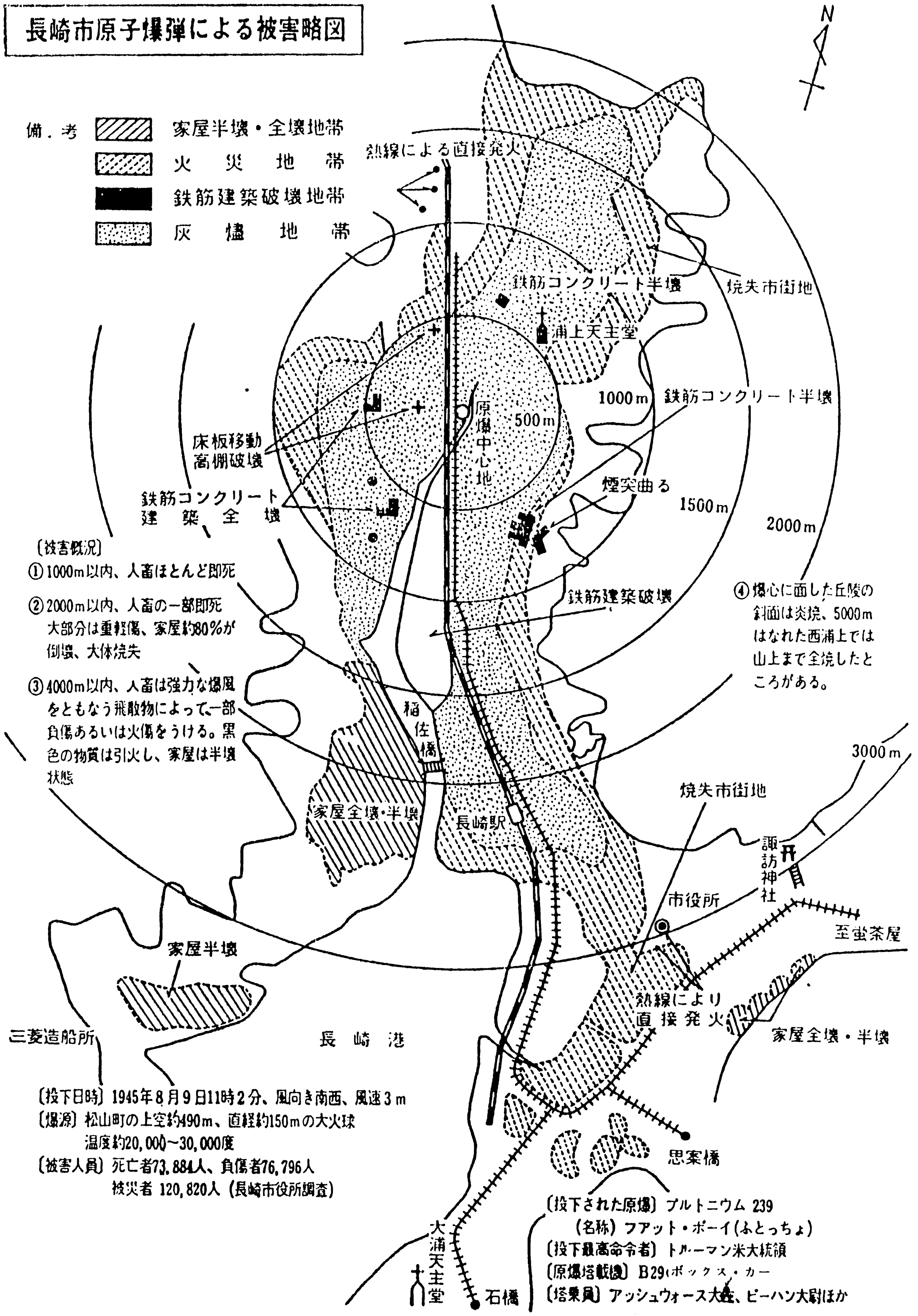
ある時は元気に走りまわっているかと思うと、急にぐったりとなり、リンゴのような顔が紫色に変わるのです。

今も、その子が元気だった頃、病院の屋上でいっしょにとった写真を眺めるたびに胸がつまります。

3歳にあとすこしという時、病状は急変し、もうベッドに起きあがる力もなく、静かに横になったまま連続の輸血を受けるようになってしまいました。私も白血病と診断された頃から献血していましたが、病状が急変してからというものは、もう数人の献血では間に合わず、私たちの会社全員の献血が必要となりました。皆もその子のためにと祈りました。そして死は2日のび、3日のびて、親は非常に喜んでくれました。しかし、友人からは死が間近であることを聞かされ、私は仕事が終わるとすぐ病院にかけつけ、その子の手をにぎって慰めてやりました。だが、とうとう私のそばで最後の息をひきとりました。私はわが子のように何度もその子の名を呼びました。だが、その子は目を閉じて二度と見開くことはなかったのです。

神から生をいただき、善悪の判断もできない罪のない幼い子どもを、誰がこの世からひきさいたのでしょうか。私は思う。原爆をつくり出す者は人でありそれを使うのも人である。それなのになぜ白血病をなおす人はいないのだろうか。戦争のためにどれだけの人が、財産がこの世から消されただろうか。今も原爆のために苦しんでいる人がいるのです。一日も早く全快できる日を望んでやみません。(長崎の証言第5集)

資料 2



「ながさき平和案内」より

3．授業案

（1） ねらい　8月9日に長崎に原爆が投下された事実を再認識し、あらためて被害の大きさ、悲惨さ、それが今なお続いていることを理解する。

（2）展開例

学　習　内　容	留　意　点
1．8月9日が何の日かを確認する。	・58年前に長崎市に原爆が投下されたことを再確認させて、本時の学習を展開していく。
2．資料①「おかあちゃん」を読む。	
3．資料②を見て、原爆の被害の様子を発表する。 投下日時、場所、被害者、家屋、加害国など	・被害の様子を具体的につかませ、今後の原爆教育の基礎事項として定着させたい。 ・なぜこのような大きな被害を受けたのかを話し合い、あらためて原爆の悲惨さを認識する。
4．原爆の後遺症を知る。 原爆症　被爆2・3世など	・資料③「あの子は目を閉じた」を読んで、原爆の爪跡が現在も続いていること、原爆症、被爆2・3世の問題を具体的につかむ。
5．私たちは、原爆の日を機会に今後どうすべきか話し合う。	・現在の核問題にふれ、今こそ核廃絶と平和の維持の大切さを認識する。
6．原爆の問題について感想文を書く。	・感想文を書くことにより、一人ひとりの意識をまとめ、次の課題への展開とする。

（3）資料　①「おかあちゃん」　②長崎市原子爆弾による被害略図
③「あの子は目を閉じた」